

---

# アーモンド・バニラ・ミックス

LlednarTwem

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アーモンド・バニラ・ミックス

### 【NZコード】

N4380M

### 【作者名】

Liednartwem

### 【あらすじ】

先輩と後輩のスイートラブ！

後輩はもともとゲイなる素質は無かつた、先輩が彼の人生を触れ徐々に後輩を変えてゆく・・・

3月26日2030年、僕の物語はここから始まる、

「何考へてるの?— これで、6回目よ!—?」

僕の彼女が怒つてゐる。

彼女のせつかくなデート壊したからだ・・・

「・・・」彼女には何も言えなかつた。

「ねえ、喋つて見たうどう? 唯、だまつてたら何にもならないじやない!—!」

「・・・」

「もうしらない!私たちは、もう終わりよ!—」

彼女は、さつさと言つてしまつた。

僕はこう思つ。

『彼女の心を痛ませるより、この方が良い』

賑やかな都会の道をトボトボと歩きながら家へ帰つた。

周りを見ると沢山のカップルがいてなんか楽しそうな雰囲気が羨ましかつた。

## 第一章：これが本当の僕?

僕の名前は、レドナー・トウウエム、16歳、男、独身、恥ずかしがりやで、ちよつとおしゃべりは得意じゃない、そのおかげで友達がとても少なく、『学校』はとても寂しい

と言つ考へが頭の中に焼きついていた。

偶々今は、夏休みの期間のド真ん中、だからそれを考へてもとても意味が無いので、のんきで夏休みを過ごしてゐる。

僕はお母さんと一緒にすんでいて、お父さんの行方は生まれてから知らない、僕達は家では2人だけでも、寂しくはないし。

「ただいま！」お母さんに残念な事があつたつていづりなんて言えないから、少し元気な表情で挨拶してみた。

お母さんは台所でお皿を洗いながら僕に答えた。

「お帰り、デートはどうだった？」

「良かったよ、楽しかった。」真っ赤なうそだ・・・

「あら、良かったじゃない、次のデートもあるんでしょう？お母さんに教えて、一人ともお弁当を作つてあげるから」ワクワクしながら、お母さんは答えた。

「えー！お母さん毎回お弁当作るとき何度も失敗してるじゃない！」

「そんな事言わないでお母さんに任せなさいーちゃん」とその為に練習しておいたんだから。とにかく次のデートが有つたらお母さんに知らせてね？」

「はい、はい、わかつたよ」

お母さんはちよつと料理が下手で、お弁当作るなんてちよつと面白かった。

「お母さん、なに？急に・・・恥ずかしいじゃない。」お母さんは急に僕に抱きついた。

「レドナー、ちゃんと覚えててね・・・レドナーが好きな人がいても、お母さんは、ちゃんとここにいるから、もし困ったことが有つたらお母さんに教えなさい。」

「・・・」僕は何も言えなかつた、こんなにお母さんが思つてゐるなんて想わなかつた。

「さあ、お風呂に入りなさい、汗まみれじゃない。」

「う、うん」

僕は、お母さんに嘘を言つのが苦しかつた・・・

湯に入りながらそれを考えてた。

『やつぱり、言つておいけばよかつたかな・・・』

15分ぼつとしてたら、急に携帯電話が鳴り僕は驚いた。

「だれだ、こんな時間に・・・」頭をポリポリかきながら、携帯を

見ると

『1メール・マーシュ・ラディウルから』

マーシュ・ラディウルは19歳で背が高く、僕の先輩で成績が良くて、とてもかっこいいラグビー選手だ、体つきも良くて、女の子にはとてもモテモテだつた。

でも最初に僕が学校に入ったときから彼女は無かつたつて言つ噂も有つた。

それで、早速メールをあけて見ると・・・

「レドナー、明日は都合は良いか？返事を待つてる。」

明日か、明日のスケジュールは元彼女のデータのはずだつた、彼女はもう”いない”から明日はポッカリ空いてる、

でも、何でだろ・・・

急に頬がポツポして來た、赤くなつてる・・・！

僕は頬を両手で叩いた、何で赤くなるんだ〜〜！！！

とにかく、返事はしておこう・・・

「マーシュ先輩、如何してですか？ええ、明日は空いています。」

その返事を送つた後、風呂場から上がりタオルを腰に巻いて、部屋へと向かつた。

部屋に入ると、そこでお母さんが僕の机をきれいにしていた。お母さんが、僕の顔をみてキヨトンと聞いた。

「あら、そんなに赤くなつてどうしたの？」

「な、な、何でもない」

「そう、それじゃ、レドナーおやすみ。」

「うん、おやすみなさい」

パジャマに着替えて、ベッドの中に潜り込んだ。

マーシュ先輩の返事には見なかつた。

10分も無い内にすぐに眠れた、疲れてたんだ・・・

次の朝・・・

僕はベッドからガバッと起きた、汗まみれで、顔がとても熱い、とんでもない夢を見た。

それが、マーシュ先輩とキスしてしまった！

「どういう意味だ・・・、訳が分からない」両手を見ながら呟いた。叫びたい、混乱が僕を包み込んだ、

「唯の夢だ！唯の夢だ！唯の夢だ！」

「レドナーー朝ご飯よ、もう起きなさいー！」

お母さんが明るく僕を呼んだ、とにかく携帯の時間を見た、もう7時32分だった。

マーシュ先輩の返事が有り、そのメールを読んでみた。

「そつか・・言いたいことが有るんだけれど、明日朝8時、町の力フェテリアで待ち合わせしよう」

しまった、もう7時半以上じゃないか。

「レドナーーもう起きてるの朝ご飯の用意できたわよー！」お母さんが呼んでる。

「はーい、起きてるよ」早々着替えた、先輩の待ち合わせに行けないなんて恥ずかしいから、何はともあれとにかく急いだ。お母さんが僕が着替えてのをきずいた。

「あら、どこかお出かけ？」お母さんがキョトンと聞いた。

「う、うん、まあね。」懶ぎながら答えた。

「じゃあ行つてくるね。」

「朝ご飯食べないの？せっかく用意しておいたのに。」

「後で食べられるじゃん、とにかく行かなきや、待ち合わせがあるから。」

「そう、私も後で出かけるから、おかげは冷蔵庫に入れといあげる。」

「お母さん、有難う」僕は一いつつて顔しながら答えた。

「あらあら、どう致しまして、じゃあ気をつけてね。」

僕うなずいた、家から出て町へと急いだ。

何故か足がとても軽くて10分ぐらいだけでカフェテリアに着いた、

マーシュ先輩はまだ来てなかつた。

カフェテリアでとりあえず「コーヒーを飲みながら15分ぐらい先輩を待つた。

すると、先輩が走つてきた。

「マーシュ先輩どうしました？そんなに急いで。」心配しながら先輩に声をかけた。

「とにかく来て、早く！僕たちおいかけられてるから…」息をつかみながら彼は答えた。

「えつ！ええつ！」びっくりしながら僕は言った。

先輩が僕の手つかんで、走り出した。

彼はとても速い、躊躇ながらに引っ張られた。

「しまつた、追い込まれた！」

「えつ！誰に？！」混乱しながら聞いた。

彼は答えなかつた、僕と彼は小さい通り道を右に曲がつてもつと走つた。

僕は、彼の手を振り落とし、まっすぐ聞いた。

「ねえ、先輩どうして僕たちは走つてるんですか？まだ何なのか聞いてませんよ！」僕は頭にきた、訳も分からず、朝から引っ張られて、とにかく理由が聞きたか

つた。

「そんなに怒らないで、こっちに来て、何故かつて言つから」先輩はあせつて僕を近寄せた。

僕は、黙つてちかずいた、

先輩は、急になんらかにきずいた様に、僕の手を取つて抱きしめた。

「ちょっと、どうしーー？」

なんと、先輩は抱きしめた僕をキスしたのだ、何でか分からぬ、柔らかい唇を感じ、僕の顔が急に熱くなつてきて、真っ赤になつた。ファーストキスを先輩に奪われたのだ、それも男の子から…！信じられない！

ふとすると、後ろからなんかうるさい女の子達の声が聞こえてきた。

「そんなん、マーシュさんってゲイだったの？！」

「よつやく、マーシュ先輩の唇から僕の唇は離れた。

「ああ、君達か・・・見られちゃったのは見られたな・・・君達の見たのは内緒にしてくれないかな？」焦りながら、彼は彼女たちに頼んだ。

「マーシュさん、たとえあなたがゲイだとしても、私達はあなたのファンよ、頑張つて下さい！じゃーねー」

そういうながら、彼女達は去つていった。

先輩は僕に振り向いた、

「大丈夫？」

「・・・」

「あつ・・・ごめんな急に、あのファンクラブがうざくてさ、他に出来ることが思いつかなくて、つい君を・・・」

「どうして僕なんですか？」僕は真っ赤になりながら、彼を聞いた。  
「おつ、おこ、どうしてそんな顔してるんだ？」彼も真っ赤になつている。

なんかおかしい光景だ。

「当たり前じゃないですか！」僕は、怒りながら彼に言った。

「だから、他の人は思いつかなかつたから・・・俺からも誤つてるじゃないか」焦りながら彼が答えた。

「先輩酷いですよ、僕達は付き合つてないのにキスだなんて！」  
間違つた！口が滑つてしまつた、どうしてそんなことを言つんだ？

先輩は僕の言つた事を大笑いにした。

「ははは、そうか、それもそうだな。」

「間違いです！誤解です！」もつと真っ赤になりながら、さつき言ったことを取り消したかった。

「じゃあ、今日は代わりにおごつてあげる、御免だけじゃすまない  
ようだし、それで良いか？」

「えつ？何ですかそれ・・・デート？！」

「まあ、そういう事かな」彼はウインクして答えた。

先輩は僕の手をもう一度取りながら歩いた、町を横切り、人の少ない道に出た。

「ここは……？」

「俺の大好きな場所、俺つてこんなスポーツやつてるけど、やつぱり静かな場所は好きってここかな」彼は笑顔をしながら答えた。5分の歩きをした後、僕達は一つの小さな、チヨコッとした可愛らしい「ヒーヒーショップに着いた。

「何が欲しい？」彼が答えた。

「コーヒーは、好きじゃないし、何でもいいよ……」

「そうだな、バニラ・アーモンドはどうだ？」

ぼくは、頷いた。

「じゃあ、俺はいつものをお願い

「畏まりました、マーシュさん珍しいですね、お友達を連れてくるなんて」バーキーパーのお姉さんが「ヒーヒーを作りながら聞いた。「まあな、彼に悪い事したし……彼のバニラ、美味しいしてやれよ、彼をいつもここに連れてきたいんだ」

また、僕の顔が真っ赤になつた。

「了解！」バーキーパーのお姉さん元気よく答えた。

「……」

ぼくは、唯、黙つていただけ……さっきの事件がまだ頭に浮かぶのだ、なんと言つても”その”事件が頭に振り切れなかつた。混乱したままだし、ちょっとおかしいのが彼の唇が……とても、柔らかくて……もつと……

ああつ、レドナー何考えてるんだ!! 彼は男だぞ! でも、それで何が悪いの?

「なあ、まだ俺のこと怒つてるのか?」

「怒つてるだなんて、そんな事……無い」 静かに答えた。

「じゃあ、なんで黙つてるんだ?」

「唯、考えてるだけ、頭の中がいっぱい、とにかく外で話しちょう

彼は、頷いた。

僕達は外のテーブルに座り、コーヒーを待つた。

「御免な・・・」彼が呟いた。

「それは、良いよもう終わつたし、時間を巻き戻すことなんて出来ない」頬を赤く染めて答えた。

「それで、聞きたいことつて何？」

僕は唾をゴクリとのどを通り彼に聞いた。

「男と男の付き合いつて悪いことなの？」

何分間の沈黙が続いた、そしてその沈黙が破つたのはバー・キー・バーのお姉さんだった。

「二人とも、なんかとても深刻的な話ね」お姉さんがクスッと笑つた。

彼女はニコニコしながら僕達のオーダーを置いていった。

「そうだな、それも考えて見なかつた、とにかく、そのバニラ試してみなよ」彼が答えた。

「うわあ、これ美味しい！」僕は彼が選んだ、そのバニラ・アーモンドを飲みながら言った。

「だろ、だからここは俺の好きな場所だつて」

「もう、一つの質問がある・・・」戸惑いながら彼に声をかけた。「如何して、僕を選んだの？」と続けた。

「んー、それも考えなかつた、唯、レドナーと親しくしたかつだけ、それと”あれ”するまでのことが起こるなんて想わなかつたからさ」「さ」

彼が可愛く笑顔しながら答えた。

「それと、なんて言うかレドナーの事他の友達より違う感じがあるから、だからお前と話したかつた。」と彼が続けた  
「そう・・・」彼の可愛らしい笑顔を見て真つ赤になりながら答えた。

僕達はいろんな事が話になつた、僕の毎日の過ごし方とか、好きな色とか、アニメなど、他にもいろいろな事を話し合つた、

まるで本当に「デートをしてるみたいに・・・

そのおしゃべりが4時間まで続いて、僕達はやつと時間に気がついた。  
「先輩、もう帰ろう、昼ごはんの時間だし、バーラ・アーモンド有難う御座います。」恥ずかしながら、彼に言った。

「あ、もうこんな時間だ、もし良かつたら家で昼食したら?」優しく彼が答えた。

「そんな、先輩恥ずかしいです、次にしましょう、家族にもまだ会つてないし」

「そうだな、次で良いか・・・」

それで、僕達はまた歩きながらもとの町へと戻った、数分道を歩いてる途中に僕達の道が分かれる事になった。

「ここで、お別れだな。」彼が沈黙を破つた。

「お別れだなんて、また学校にあえるじやない」

「そうだな、じゃあまた、デートしようぜ」彼はクスクス笑いながら道へと向かつた。

「・・・じゃね先輩、気をつけて」僕も家への道に向かつた。

僕が数秒歩いたとき、先輩が叫んだ。

「レドナー! おまえのキス良かつたぜ!」と言つて彼は走つていつてしまつた。

僕は唯そこで口チコチに立ち止まつただけ、なんていうか、恥ずかしがるか、怒るか、困るか、それとも喜ぶか感情がゴチャゴチャしあじめた。

最初の求愛、最初の男とのデート、最初の男とのキス、何もかもが信じられなくて、まるで夢のファンタジーみたい、

夢・・・! 今朝の夢が本当になつた! と言つと僕はもうゲイ? それが本当の僕なんだ・・・

指先を唇にあてておもつた。

まあいいや、いま僕の心に感じているのが重要だつておもつた、前に進まなきや何もならない、

クスッと笑いながら家へと向かつた。

「先輩のキスもっと欲しかったな・・・バーの呑んで、柔らかくて・・・やつぱりこれって恋?」

つづく・・・

(後書き)

読んでくれて、有難う！  
最初の作品なんですが、コメントとかお待ちしています、助言もモチ  
嬉しいです。

これからもプロシク！

Ray·From Philippines  
"レイ"

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4380m/>

---

アーモンド・バニラ・ミックス

2011年1月19日00時03分発行